

# 狭間家略履歴および豊後国凶田帳考證の史料価値

重泰—狭間大炊四郎

法名性隆

佐藤 末喜

(中略)

はじめに

狭間直重が文永の役の恩賞によって、阿南荘松富名(狭間村)を領有したと説く論者が典拠としているのが、後藤碩田の「狭間家略履歴」(大分県史料二六)と「豊後国凶田帳考證」である。筆者は拙稿「狭間直重の地頭職」(挾間史談第四号)で元寇恩賞説を否定したが、ここでは先学諸氏が論拠とする前記二著の史料性について検討を加えた。

秀長—狭間助左衛門、白杵住云々」とあり、始祖直重から天正年間までの長い記録である。直重の項にある、「領豊後国大分郡狭間村 依称間氏」は、豊後国大分郡狭間村を領有したので、地名をとって 狭間氏と名乗ったという意味であつて、ここには文永の役の恩賞で賜ったなどという解釈は全く入り込む余地はない。このことは重要なポイントである。

## 二 狭間家略履歴

後藤碩田が書いた狭間家略履歴をしてみる。

一 狭間家譜(大分県史料二六)の構成  
大分県史料二六の「狭間家譜」は「狭間家略譜」と「狭間家略履歴」とから成っている。狭間家に伝わる系譜である「狭間家略譜」と、それを後藤碩田が考証、解説したのが「狭間家略履歴」である。まず系図である「狭間家略譜」をみてみると、

「直重—狭間大炊四郎、初名有重、法名龍祥寺、自明覚宗  
母阿波藤内左エ門尉女、領豊後国大分郡狭間村  
依称狭間氏、狭間家祖也、在城干大分郡阿南郷  
龍原村権現岳

「初代狭間大炊四郎藤原直重ハ、大友鼻祖大友能直の嫡子大友二世親秀の四男、大友三世頼泰の弟にして、文永十一年父兄と同く、筑前博多津蒙古襲来の役に出陣して、元賊を討、大に功ある人なり、豊後国 大分郡阿南荘を食邑に賜ひ、其所に世々住居す、其地今の向の原・上市・下市・鶴田・海老家・古原・来鉢・中畑・平床・赤野・北方・東行・柏野・鬼ヶ瀬・池ノ上等十六村の知と云へり、弘安年間豊後国凶田帳に 曰、大分郡阿南荘八十町領家室大納言、地頭守護所狭間尼公生蓮孫忠用鬼丸伝領、今又四郎直親、又 同郡同莊松富名三拾五町狭間尼公生蓮跡同前とあり、因に云、真守が凶田帳考證に尼公生蓮ハ、狭間直重の母阿波藤内左衛門女とある人か

云々、又四郎直親ハ直重の孫、狭間三世大炊助又四郎直親也、同氏代々の居城は、大分郡阿南荘龍原村権現岳也、香華の院ハ向原村積翠山龍祥禅寺なり、當寺に狭間氏代々の木主及過去帳古墳等疊々とあり、萬屋文章に龍祥寺に作れり、一抛とすべし、

二世狭間大炊四郎重泰、傳不祥、

(中略)

狭間内記、慶長五年石垣原役出陳見、傳不祥、

萬屋文章を見るに、狭間民部大輔の當多し、中ニ山城守當あるを以見るに、鎮秀の二男式部少輔秀就、民部大輔に転せしにや、天正年朝鮮役以後に式部少輔なる人見へて、民部大輔なる人なし、萬屋文章多天正年間の迄のものなり、此一綴、大友家景簿及古記傳・古文章・龍祥寺過去帳等に抛て、大凡を挙るものなり、とある。この文中の問題点を指摘すると

① まず(ア)の「文永十一年父兄と同く」は、父大友二代親秀や兄頼泰とともに出陣したとするが、親秀は宝治二年(一二四八)に没していて、文永十一年(一二七四)は実に没後二十六年に当たる。単純な誤りというよりも碩田の年代感覚の曖昧さを示している。

② (イ)の「大分郡阿南荘を食邑に賜ひ」の「賜う」は、「与える・授ける」の尊敬語で、「勲章を賜う」などと使われる。元賊を討つ功績に対して幕府よりの恩賞で阿南荘を得たという意味になるが、史料の根拠が示されていず、碩田の個人的解釈に過ぎない。

③ (ウ)の「其所に世々住居す」とあるが、文永の役之恩賞の沙汰は一二七五年であり、十年後の弘安八年(一二八五)の豊後国図

田帳には、孫の直親が地頭として出ている。僅か十年間を世々というのであるか。

④ (エ)の「因に云、真守が図田帳考證に尼公生蓮ハ、狭間直重の母阿波藤内左衛門女とある人か」は、全くの誤認であつて、尼公生蓮は直重の未亡人である。野津本大友系図によれば、

大炊四郎狭間

次郎他界

童名土与鬼狭間地頭

直秀

親直

直親

(重泰)

母朽網兵衛女

とあり、図田帳に「地頭守護所並狭間尼公生蓮孫忠用鬼丸伝領」とあることから、直親は直重と尼公生蓮夫妻の孫であることが判然とする。以上に指摘した如く、碩田の考證には誤りが多いのである。この碩田の考證を史料として採用している例を挙げてみよう。

角川日本地名大辞典・大分県編の狭間村の項に、「狭間家略履歴によると、大友二代親秀の四男で、狭間家の祖となつた大炊四郎直重が、文永の役之恩賞として、阿南庄狭間邑を賜つたという。」とある。また狭間町誌には「狭間尼公生蓮は、前に述べた狭間氏の祖、大友親秀の第四子狭間大炊四郎直重の母、阿波藤内左衛門尉女と考えられ、その孫二代重泰(忠用鬼丸)を経て、弘安年中には、三代又四郎直親が地頭職を領有しているのである。」と引用している。繰り返すが碩田の「狭間家略履歴」は、あくまでも碩田の考證であつて確たる史料の裏付けがあるわけではない。

### 三 豊後国函田帳考證

「阿南荘八十町

(前略) 狭間尼公生蓮ハ大友家譜に親秀四子狭間大炊四郎直重母阿波藤内左衛門尉姉とあり、是なるへし、狭間直重ハ文永中蒙古襲來の時武功、大分狭間邑を食邑とす、依之為氏、代々居之、直親ハ直重の子なるべし、末考、忠用ハ三浦本土用と有、狭間氏の末応仁年間土用松丸と云童名の 人あり、可考、今五十七村有、郡西也、」

⑤ 前記④と同じく尼公生蓮を直重母としているがこれは誤りである。

⑥ 「直親ハ直重の子なるべし」としているが、略履歴では「又四郎直親ハ直重の孫」と書いていて混乱している。正しくは孫である。

⑦ 「文永中蒙古襲來の時武功、大分狭間邑を食邑とす、依之為氏、代々居之」の一項は、前記②と同じで、文永の役恩賞説の拠所となっている。ただ②では「大分郡阿南荘を食邑に賜ひ」と書いているが、ここでは「大分狭間邑を食邑とす」としており、松富名(狭間村)に限定している。函田帳を正しく読めば、「(A)直親は大友頼泰と阿南荘の惣地頭職を折半している。(B)直親は松富名の小地頭職を帯している。」ということになる。豊後国函田帳の中に、狭間氏が出てくるのは阿南荘のほか、飯田郷がある。「飯田郷 見良津名 玖町同前 豊前大炊四郎直重跡孫子鬼丸、今又四郎」と記載されている。阿南荘の「地頭職守護所並狭間尼公生蓮孫

忠用鬼丸伝領、今、又四郎直親」とを相互に考証すれば、狭間直重と尼公生蓮が夫婦であり孫が直親であることが分かる。大友二代親秀の未亡人・阿波藤内左衛門尉女が狭間尼公生蓮と同一人物であるとの珍説が生まれようもない。おそらく碩田は飯田郷の記事を読み落としたのであろう。近代歴史学を学んだ、はるか後年の昭和の執筆者達が、碩田考證の誤りをそのまま引用しているのは、まことに残念というほかない。

#### 四 後藤碩田について

江戸末期の学者、文化人で二豊考古学の先覚者と云われた博学者である後藤碩田の人物像について、元大分大学の豊田寛三氏は、「一八〇五―一八八二 大分郡乙津村(現大分市)の人。通称今四郎、字は大化。家は代々富豪で、紀州徳川家、岡藩中川家、白杵藩稲葉家などの用達であった。父守只是高山彦九郎らと尊王を唱えたため碩田もその影響を受ける。帆足万里に漢学、田能村竹田に詩画、渡辺重名に国学、熊本藩池田慶太などに砲術を学ぶ。歴史、考古学研究などに努める一方、兵を募り軍法を教授したため一八四二年(天保十三)幕府から謹慎を命ぜられた。その後、京都に行き有栖川宮、中川家に入し、ペリー来航に際して小河一敏らと大いに攘夷を唱える。高杉晋作とも手紙のやりとりをした。府内藩にも尊王説を主張した。一八七一年(明治四)西寒田神社主典となり権大講義まで進んだ。著書に六〇〇巻にのぼる「碩田叢史」のほか、「大

化帳」「石垣原戦略考」「豊後国国田帳考證」がある。」と評している。

碩田の業績の中でも特筆すべきは「碩田叢史」の編纂、収集である。豊後を中心に九州地区、その他全国に及ぶ諸文献を購入したり、人に頼んで書き写したものの、又自分で写したり著述したもので、その内容も史書、地誌、考古学書など多種多様にわたる。その多くが今日の郷土研究に欠かせない重要な史料を提供している。

おわりに

近代歴史学以前の人である後藤碩田が、自説を著述した「狭間家略履歴」や「豊後国国田帳考證」には多くの誤認があり、無批判的に史料として引用することの非を縷縷説明してきた。碩田自身もまさか自説が、後世の歴史書に史料として登場するとは思ってもよらなかったに違いない。

註

一 豊田寛三「大分百科事典」